編集後記

■今年の冬は寒かったし、冷たかった。裏の広場の水溜りも何度も薄氷が張った。1月中には45センチの積雪もあり、わが家の古家も下り棟が落雪に押し流された。春が待ち遠しい。そして、3月下旬にはシネマ游人第3号が発行される。先ずは3号雑誌をクリアした。寄稿者の自由なバラエティーがあり、楽しめると自負しておりますが、秋季第4号辺りから同人誌としての幹を問われるのではと思っている。最近、気にしている映画監督の富田克也の紹介記事を見た。（日経新聞2月1日夕刊）記事タイトル〝アジアの現実に迫る〟『バンコクナイツ』。富田は相澤虎之助（空族）と共に映画製作から作品配給まで一括して行う。肉体的・行動派として今までの監督とは異質な切り込み方を持つ。小生も4月の名古屋公開を楽しみにしている。過去の作品として、07年『国道二十号線』11年『サウダーヂ』など。みなさんも是非観てほしい。アジア映画は益々おもしろくなってきた。

（中村）

■地元評論家の重鎮、清水信氏が亡くなった。一月の末頃だったと思うが、四日市文化会館のロビーに置いてあるチラシコーナーで、「四日市文芸賞受賞記念講演　清水信」という冊子が目にとまった。ペラペラと何気なくめくっていると、小誌「シネマ游人」を激励するコメントがありびっくりする。編集会議でも話題になり、気合いを入れていこうと言うことになった。その直後の訃報である。そうこうしているうちに、今度は映画界の長老鈴木清順監督の死の知らせが入って来た。四日市出身の藤田敏八とは盟友である。結局、急遽、追悼コーナーを設けることにした。

（林）

■今号から、スタッフとして仲間に加えていただきました。若輩者ですが、よろしくお願いいたします。シネマ游人第2号への寄稿をご縁に、11月3日の東アジア『名作戦争映画』上映会に、スタッフとして参加させていただきました。打ち合わせや忘年会のときに、他のスタッフの皆さんと映画の話ができるのが、すごく楽しいです。シネマ游人を通して、映画好きな方々の交流が深まることを願っています

（村上）

■昨年の秋から今年の2月中旬までの4ヶ月間、座骨神経痛のような痛みに襲われた。健康だけが取り柄の私には信じられないことであった。とにかく座ると腰からくるぶしまで激痛が走るのだ。脳裏に真っ先に浮かんだのは映画が観れない、シネマ游人の会議に参加出来ないことだった。この間、スタッフには大変な迷惑と心配をかけてしまった。しかし、2月26日の東スポ映画大賞授賞式を目前にした矢先、突然、前触れも無く完治した。発症から今日まで支えてくれた家族とスタッフには、感謝の気持ちでいっぱいである。後記に変えて御礼を言いたい。

（森）